NAED 通信 No.36　NAED：NARA Associates of Ecological Development

発行：NAED 一般社団法人地域づくり支援機構　発行日：2024 年 5 月 1 日

◇京都府唯一の村「南山城村」で拡がる移住者たちのナチュラルな地域おこし活動
野崎弘之（地域 P&C 第 9 期生）……*1 頁*
◇蒲生 4 丁目のまちづくりと共生社会の考察　野口隆（理事／奈良学園大学特別客員教授）……*6 頁*
◇第 16 回 NAED 地域づくりシンポジウムご案内……*8 頁*

京都府唯一の村「南山城村」で拡がる移住者たちのナチュラルな地域おこし活動

野崎弘之（地域 P&C 第 9 期生）

1. たかが「空き家」されど「空き家」

南山城村役場の「移住交流推進員」として活動を始めてから、早や 8 年が過ぎようとしています。村内の空き家問題に向き合い、1 軒ずつあらゆる方法で課題解決をやり続けてきました。空き家の問題は全国共通だと思いますが、大きな問題は、1)不動産契約、2)改修費用、3)動産物（ゴミ）問題の 3 つです。

南山城村には「空き家バンク」の制度があり、プロの不動産業者である専門家（南山城村出身）が「空き家バンクアドバイザー」として認定されています。契約時に、物件所有者と賃貸借人または物件購入者との間を取りまとめてくれるので、南山城村は「自治体として最も困難な課題」をクリアできている非常に珍しい自治体だとも言えます。またこの制度を活用すれば、条件さえ満たしていれば最大 180 万円の改修補助金が受けられます。この 2 点をスムーズに進められるのは、空き家問題に取り組むうえでかなり有利です。

そして、3 つ目の動産物問題ですが、これが物件所有者さまにとって最も頭を抱え込みたくなる問題かもしれません。実家の片付けとか両親の私物の片付けというのは、思った以上に時間と労力を擁します。原則的には「所有者さまが片付ける」のがルールなのですが、**「所有者さま自身が高齢である」「遠方にお住まいで何度も来れない」「業者に処分を依頼すると高額である」**という理由で、せっかくの数少ない空き家バンク案件が滞ってしまうのです。

ここで、私「移住交流推進員」の出番となります。所有者さまにある提案をします。「大切なモノだけを回収し、残りの動産物をすべて放棄してくださいませんか？」と。そこからなんと「空き家片付けイベント」と称して、片付けボランティアを募るのです（笑）。南山城村では「粗大ゴミ」を委託業者が回収してくれる日が月 1 回あります。その際に布団・タンス・ベッド・椅子・テーブルなど、嵩張る動産物を一気に無料で処分してしまいます。もちろん細かなゴミの分別作業もありますが、人海戦術での作業は参加者同士で和気藹々と楽しんでもらえるようで、想像以上に盛り上がり好評なイベントになっています。

こうして 1 軒ずつ「空き家バンク」に登録し、移住者や物件活用者を公募し

■南山城村空き家バンク制度の動向
期間：H28.10月～R5.12月

○物件登録件数（売りたい・貸したい）　（件）

	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	計
売買	3	3	3	3	3	5	3	3	26
賃貸	3	1	4	0	4	4	5	1	22
計	6	4	7	3	7	9	8	4	48
			再登録1	取下げ3	取下げ1	再登録1	再登録1	再登録1	

○うち成約件数（登録件数中の成約。成約年度は問わない。）　（件）

	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	計
売買	2	3	3	0	2	4	2	2	18
賃貸	3	1	3	0	4	4	4	1	20
計	5	4	6	0	6	8	6	3	38

ます。ただの1軒の空き家であっても、人口および世帯数の少ない南山城村にとっては大切な資源となっています。

2016年から始まった南山城村の空き家バンク制度ですが、**「登録物件は少ないけれど成約率が高い」**という特徴が見受けられます。たかが空き家されど空き家、空き家が空き家のままでいることには何のメリットもありませんが、その空き家に「人ひとり」でも住んでくれれば、地域は何らかの変化を起こし始めます。

2. 移住交流スペース「やまんなか」に集う移住者ネットワーク

南山城村田山地区にある移住交流スペース「やまんなか」は、移住促進事業の機能をもたせつつ、**移住者**や**移住希望者**、地域住民や村への訪問者が交流できる施設です。訪れる人たちが村のファンになり、地域住民に何かしらの刺激を与えてくれ、村との関係性を持続してくれる「関係人口」のひとりとなってくれるような場づくりを心がけています。必然的に、**移住者**が気軽に集まる場所になっていて、様々なサークル活動が生まれたり、**移住者**同士でユニークなコラボレーション企画が起こるようになりました。

ここで、**移住者**たちが自発的に活動している事例をいくつか紹介させていただきます。

①村のおばあちゃんから漬物を習うツアー

おばあちゃんに漬物習う　南山城

若い世代、たくあん伝授

南山城村野殿の中村春子さん(82)が、村内の若い世代に自家製のたくあんと日野菜漬けの漬け方を伝授した。漬物歴60年以上の中村さんから、漬けたことのない若い人たちが、一つ一つ手仕事を学んだ。

19歳で野殿に嫁ぎ、漬け方を義母から学んだ中村さんは、冬仕事として、毎年たくあんを100本は漬けているという。

この日は2週間前から干していた大根30本を用意し、塩とぬかなどを手でこねながら、1本ずつ容器の中に重ねていった。もともとたくあんだけの予定だったが中村さんが「日野菜もやろか」と呼び掛け、当初予定していなかった日野菜漬けも同様に漬けた。9月には食べられるという。

漬け方講座が終わった後、参加者や野殿のお年寄りらが集まって中村さんお手製の紅白餅や漬物を食べながら歓談した。

中村さんは「私も楽しかった。みんなが勉強してくれて、また漬けてくれたらうれしい」と笑顔を見せた。

（阪口彩子）

60年以上漬物を漬け続ける中村春子さん（右から2人目）にたくあんの漬け方を学ぶ参加者ら＝南山城村野殿

若い**移住者**たちが、「もっと南山城村を知りたい」という純粋な気持ちから発展した企画です。**移住者**たちが能動的に地域の魅力を探すようになり、地域ならではの食文化や伝統行事などに目を向けるようになってきています。この企画に対して、地域のおばあちゃんは大変好意的に協力してくださいました。当初は、漬け方を教えてもらうだけでしたが、後日、よもぎ餅の作り方を教えてもらったり、一緒に食事会を行ったり、より良好な関係を築くキッカケとなったようです(笑)。この企画は京都新聞に掲載され、結構な反響がありました。

②サバ寿司作り教室

南山城村で昔からお祝いの席などで食されている伝統料理「サバ寿司」を作りたい！と、**移住者**たちの間で話題になり、サバ寿司の作り方を教えてくれる人を地元住民から紹介してもらい「サバ寿司作り教室」を行いました。これが**移住者**だけではなく、地域住民や村外からの来訪者にも好評で、定期的に開催されることになりました。毎回新しい参加者が「やまんなか」を訪れてくれ、新しい「関係人口」の創出に繋がっています。このイベントは、KCN 京都の

「週間地域トピックス」の中でも紹介されました。※【衝撃】82 歳でも年下妻と 7 回戦!? (youtube.com)

③種の会＆種の図書館

本郷地区の**移住者**であるウチダヨウさんが、この施設内で始めた試みが「種の図書館」です。図書館のように「種」を借りていってもらい、無事に育って種が採れたら返してもらうというシステムで、農的暮らしやオーガニックライフに関心のある人が来館することが多くなりました。背景にあるのは、種への危機感です。昨今、大きな種苗会社が種の特許を取得し種子の独占を進めています。市販の種の多くは、効率的に栽培・収穫・流通することを目的に作られていて、次世代に同じ形質のものを受け継ぐことができません。「このままだと、みんなが使える公共の種がなくってしまう。種を採って、蒔いて、分かち合う。種と人とコミュニティの循環を取り戻したい！」そんな想いを持った人々の呼びかけで、米国やヨーロッパの公共の図書館を中心に、種の図書館が広まっているようです。この取り組みもメディアで紹介されています。詳細は、Life Hugger の記事でご確認ください。

※地域のみんながハッピーになる「種の図書館」とは？京都府・南山城村のワクワクする取り組み フード サステナブルでおいしい食の情報 Life Hugger

④農林産物直売所ミライ会議

南山城村役場のすぐ近くに、今年で 21 周年になる小さな農林産物直売所があります。当時は大勢の生産者の方々が様々な産品を出荷され、大変に賑わっていた時もあったようなのです。しかし、高齢化により生産者さんが離農し、産品の出荷数が少なくなってきました。そして 2017 年、国道 163 号線の好立地に「道の駅みなみやましろ村」が OPEN し、この小さな直売所にとっては痛手となってしまったかもしれません。

ですが、この「雰囲気の良い、味のある直売所」を何とか維持させるべく立ち上がったのが、**移住者**たちのグループだったのです。彼らは積極的に「生産者会員」となるのですが、自分自身で生産・出荷するのではなく、「生産・出荷ができる人たち」をさらに巻き込んでいき、たとえ出荷数が少なかろうと「分母を増やす」という手法に出たのです(笑)。また、新たなアイデアを出し合い様々な企画をするグループ「**直売所ミライ会議**」を立ち上げ、昨年の 20 周年のアニバーサリー年に「20 周年アニバーサリーさくらまつり」を開催。移住者ネットワークのチカラを見せつけるかのような集客力と企画力で、駐車場は常に満車、各ブースには長蛇の列が並び、ステージには村内で活動するサークルや団体を招いて、コロナ明けということもあり、村民にとってこの上ない盛り上がりを演出してくれました。

南山城村農林産物直売所
より良い「憩いの場」に
高齢化など課題 農家ら「会議」立ち上げ

南山城村北大河原の村農林産物直売所が、住民グループ「直売所ミライ会議」を立ち上げた。農家や移住者ら10人が集まり、地元の「憩いの場」である直売所をより良くするために知恵を絞っている。

住民たちが新鮮な野菜などを品定めしながら、おしゃべりを楽しむ直売所（南山城村北大河原・村農林産物直売所）

商品充実や催し 模索

旧国道163号沿いにある同直売所は昨年20周年を迎えた。2016年に国道のバイパスが整備され、直売所の前を通る車が減少。翌年には道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」が開業して客足が遠のき、新型コロナ禍がさらなる打撃となった。昨年は赤字を免れたものの課題が残る。

また、野菜を持ち寄る生産者の高齢化が進み、品数が減りつつある。ミライ会議では、商品を充実させ村内外の人が楽しめる場所にするためには何が必要なのかを話し合い、今後の運営に向けた取り組みを模索している。

週末に開く「さくらまつり」では、名物の「しいたけ焼き」の容器を紙製に変更し、ごみを減らして環境に配慮した販売方法を目指すなど、工夫を凝らす。

メンバーの坂本千恵さん(47)は「住民が集まり、和気あいあいとおしゃべりを楽しむ何げない時間が生まれることがこの場所の魅力。住民たちの思いを聞き、直売所を未来につないでいくために何ができるか考えていきたい」と話している。

「さくらまつり」20日開催
八重桜が見頃に
山菜、タケノコ、鹿肉カレー

直売所を運営する地元生産者の皆さまも**移住者**たちの動き方を絶賛しており、「**地域住民と移住者が手を組んで活動している**」という素晴らしい取り組みになってきています。今年も「さくらまつり」を開催し、かなりの売上を出していたようです。

ここでの**移住者**の活動も、京都新聞に掲載され話題になりました。当然のことながら課題はたくさんありますが、いつも人が気軽に集まれる「憩いの場」というコンセプトを打ち出した今後の動向にも注目です。

⑤「畑の会」で小規模生産者を増やす

そんな「生産力の低下」を何とか解消できないかと企画されたのが「畑の会」です。童仙房地区の**移住者**である坂内謙太郎さんは移住 12 年になりますが、3 児の父をやりながら「ハト畑」という屋号で農家をしています。「道の駅みなみやましろ村」の出荷者協議会の会長も務められていて、やはり将来的に村全体の生産力に不安を抱くようになりました。「何とか若い世代に生産してもらわないと・・・」山間部に位置する南山城村では、平らな広大な農地はありません。小さな段々畑で少量生産しなければならないという宿命なのですが、そもそも「農家」を育てなくても「上手な家庭菜園者」を育てた方が良いのでは？という発想で開講されたのが「畑の会」なのです。

ひと昔前に「半農半X（はんのうはんえっくす）」というコンセプトが有名になりましたが、簡単に言うと「5 割農業、5 割本業」というライフスタイルの推奨だったのです。しかし、今の若い世代に「5 割農業」というのは、ちょっとハードルが高い時代になってきたのではないでしょうか？ だから極端に言えば、最初は「1 割農業、9 割本業」を実践してみて、「1 割農業」が上手くいけば「2 割農業」にチャレンジしてみない？というスタイルの推奨がこの会の根底にあるのです。今年の受講者は 5 名ですが、**移住者**と**移住希望者**が占めており、来年以降もまた新たな**移住者**と**移住希望者**に伝えるということが繰り返されれば、近隣の市町村からも農的意識の高い「関係人口」を村に呼びこむことができるのではないかと、何かと付随した出来事が期待できる取り組みだと思っています。

⑥歴史あるこんにゃく作りグループに、移住者たちが加入

約 50 年前に、田山地区の茶農家さんの奥様たちで結成された「田山深みどりグループ」は、味噌や乾物などの保存食、草もち・こんにゃくなどの加工品を作って販売してきました。メンバーが各自の休耕田でこんにゃく芋を栽培し、お茶以外の産業創出の目的もあり、こんにゃく作りを中心とした活動になったようです。当時は 30 名ほどのメンバーでしたが、近年メンバーの高齢化によりグループ存続の危機に陥りました。現在、当時のメンバーは 1 名のみとなってしまいましたが、新しいメンバーとして茶農家の奥様と、**移住者** 3 名の計 5 名の女性で、今もこんにゃく作りを継続しています。先ほどの直売所や道の駅に出荷され、土日には結構な売れ行きとなっています。**移住者**たちが、歴史ある地域の団体の存在を守っていくというストーリーに感激してしまいます。

⑦南山城村音頭 復活！ 移住者グループ「村踊り部」の挑戦！

「道の駅みなみやましろ村」でいつも流れている民謡調の「南山城村音頭」という曲があります。昔は、村民体育祭などでよく踊っていたらしいのですが、ここ数年間は、ほぼ耳にすることがなくなっていました。そんな時に、2017 年に OPEN した道の駅で「村らしさ」を演出するための BGM として採用されたのです。道の駅で流れていた「南山城村音頭」を聞いた**移住者**たちの「踊ってみたい！」という好奇心で発足したのが「村踊り部」です。

しかし、ほとんどの方が「踊りを忘れた」という中で、昔の資料やVTRなどで再現しようと試みるのですが、すべてを解読できるわけではありません。探し続けて、元・保育園の先生にたどり着き、やっと踊りをマスターすることができました。この踊りを、音頭の歌詞に出てくる南山城村の名所で「茶娘姿」のメンバーたちが踊る動画がYoutubeで発信されています。この活動は、村の「議会だより」で紹介され、**移住者**たちのユニークな「よそ者目線」が地域住民に伝えられることになりました。

※南山城村音頭 踊り部 – YouTube

むなら 団体紹介コーナー No.132

村踊り部　発起人 坂本千恵さん

移住者によって南山城村音頭の村踊り部が発足

踊りを復活させようと、楽しく練習を進めている坂本千恵さんに登場願いました。

村踊り部の発足は

村踊り部は「南山城村音頭を踊ってみたい」という一言から令和3年8月に4人でスタートしました。

道の駅でいつも聞いているのに、いざ教えてくれる先生を探そうとしてもなかなか見つからず、第一回目の練習会では保育所の運動会の映像を見て練習しました。二回目の練習会でやっと踊れる方が見つかり、映像と異なる振付に悪戦苦闘しました。

わたしたちにつられて、村外の方も参加

月に一回のペースで「やまんなか」に集まり、楽しく踊る私たちにつられて、村外の方も参加されるようになりました。

村の紹介も兼ねて動画発信をしようとアイデアが広がりました。歌詞に合わせた♪ミナミヤマシロヨイトコロ♪を踊って撮影し、youtubeにアップすることができました。

良かったらぜひ見てください。残念ながら歌詞の中には今はもうない場所もあります。

「ちょっとした時にみんなで口ずさめる歌を」という先人の思いから生まれた村自慢の歌が私たちの心を動かし、共に踊る場づくりへと繋がりました。

南山城村音頭は、魅力あふれる村の財産です。

村踊り部 これからも続けたい

今年4月に開催された農林産物直売所のさくら祭りで、南山城村音頭に加えて江州音頭でも盛り上がりました。

村が活性化していくためにも、今後も村踊り部を楽しく続けていきたいと思っています。

一声かけて下されば時間の許す限りどこへでも伺います。みなさんもぜひ一緒に踊りましょう。

【連絡先】坂本千恵
【電話】090・8232・4651

村踊り部メンバー（右端 坂本さん）

村外の方も参加（youtube）

instagram @muraodori

議会だよりへのご意見・ご要望は議会事務局
☎0743-93-0121
またはd_gikai@vill.minamiyamashiro.lg.jpまで
「議会だより」は村のホームページでもご覧いただけます。
南山城村役場ホームページアドレス
http://www.vill.minamiyamashiro.lg.jp

9月議会日程表（予定）
9月7日(木) 一般質問
8日(金) 議案審議
13日(水) 予算決算常任委員会
14日(木) 〃
28日(木) 議案審議
29日(金) 会期末
※ 傍聴席は25席

（表紙）アユ釣り解禁 木津川清流
撮影者 花原博史氏
撮影日 6月25日

■編集・発行／南山城村議会

南山城村議会だより 2023.8.1 No.140 16

3. 子育て世代の移住者ファミリーが集まる
奇跡の集落「野殿地区」

2018年12月に、村の「空き家バンク制度」を利用して野殿地区に移住してきた磯島さんファミリーは、当時は子ども2人でしたが2020年に3人目を出生しました。なんとこの「**移住者**の出生」が、野殿地区で「15年ぶりの出生」となり村内で話題になったものです。それでも、集落人口が約60名ほど。

そんな野殿地区に、2023年3月に新しい**移住者**ファミリーが来ることになりました。移住してきた西島さんファミリーは、**子ども5人のなんと7人家族！** 集落の平均年齢を一気に下げてくれました(笑)。また偶然にも、磯島家と西島家はお隣さんとなり、**この2軒だけで「子ども8人」**という状況で、いつも子どもたちの賑やかな声が聞こえてくるエリアとなりました。西島家も、村の「議会だより」に掲載され、裏方で地道に働く私「移住交流推進員」に感謝の気持ちを伝えてくださっています。今後の自身の活動にも、とても励みになる有難いお言葉をいただきました。

インタビュー ここにこの人 No.105

西島はなさん（野殿）

人生の宝くじに当たった気分

若い家族が野殿に引っ越されてきたと聞いたので、お邪魔しました。出迎えてくれたのは2匹の犬、3匹の猫、鶏が5羽、そして5人の子どもたちとお母さん。

ここに決めたのは

夫が仕事に通える距離、湧き水や井戸水がきれいで、田んぼもできるところ。子どもたちが大声を出して気兼ねなくのびのびと駆け回って遊べる所。

以前夫婦で畑をしていて、保育士の資格を生かして自主保育もしていた。古民家を探していたので空き家が出るのを待っていた。次女の入学に間に合うよう4月に引っ越しした。

ここに来てみて

学校の規模も小さくて以前いた熊本の阿蘇と同じくらい。井戸もあり、日当たりもよくて子どもや生き物にも最適だと思った。

「やまんなか」のスタッフは家の片付けなどとても丁寧に対応してくれ、移住後のフォローもありがたかった。野殿公民館での避難訓練と忘年会へと繋いでくれた。

村の改築補助でとりあえず使う部屋は整った。水質検査は問題ないといわれたが、浄水器取り付けも申請中。

人生の宝くじに当たった気分

お隣さんも同じような子どもさんがいて、声を掛けてくれる。一緒に散歩したりカキを食べたり、何組かの家族が一緒にバーベキュー、ご飯会、餅取り、新年会。まるで宝くじに当たった気分。

近くで畑を借りているが、地域の方も畑の状況をよく見て助言をくれる。

学校は転入生を丁寧に受け入れてくれた。学年をまたいでの友達、土曜参観で保護者同士の交流もあり、自分の子どもだけでなく隣のクラスのこともよく見ていて、すぐ顔なじみになった。

この村の子育て施策もありがたく、給食、校外学習は無料、何よりも毎日の登校にスクールバスがあること。

これからの夢

下の3人の子を保育園に入れ、本格的に畑をやる時間を取り戻したい。夫婦一緒に畑をやり、子どもは畑で駆け回る。そういう時間を作りたい。

家の周りにあるブルーベリー、キウイ、キンカン、カキなどの木を手入れして、子どものおやつだけでなく直売所に出荷もしたい。昨年は枝豆を直売所に出荷できたのよ。と一気に話をしてくれました。

のびのび育つ子どもたち

近所の人とワイワイ楽しいバーベキュー

15 南山城村議会だより 2024.2.1 No.142

さて現在、この野殿地区にまた新しい20代夫婦が移住しようとしています。今は子どもが1人なのですが、なんと2人目が奥様のお腹の中にいるとのこと。もし彼らの移住が実現すれば、野殿地区に**「子どもが10人」**という京都府内でちょっとしたニュースになりそうな予感がします。彼らも「僕たちも2人で留めるつもりはないですから」と(笑)、何とも頼もしいことを言っていました。ぜひ実現に向けて、精一杯動いていくつもりです。

4. 移住者の目線と地元民の知恵

「移住交流推進員」として空き家と向き合う日々ですが、いつも「きっと素敵な人が来てくれるに違いない！」という何だか「おまじない」のような想いを念じながら、空き家の片付けを行っています。また、周辺地域の住民さんにも空き家バンクに登録することになった経緯を説明してから物件に入らせていただくように心がけています。

移り住んでくれる新しい**移住者**が、地域でより良い人間関係を築いていただくための「おまじない」なのかもしれません。決して「**移住者**だけで盛り上がる」のではなく、地域住民との活動にも積極的に参加するように事前に

伝えています。「よそ者目線」は大事だと思いますが、地域の方々の「地域で生き抜くチカラ」は、できるだけ多く習得した方が良いと思うのです。お婆ちゃんに漬物を習う、サバ寿司を習うなど、**移住者**側が「村をもっと知りたい」という目的があっての頼みごとであれば、快く引き受けてくださいます。**移住者**と地域住民とを、自然にお繋ぎすることもとても重要だと思います。

5.「消滅可能性都市」小さなことでいいから、動いていこう

最後になりますが、先日のニュースで、2014年から10年ぶりに更新された、新たな全国744自治体の「消滅可能性都市」が発表されました。南山城村は言うまでもなくこの744自治体に含まれてしまっているのですが、「30年後に推測される若年女性減少率」が前回は83.0%だったが、今回は72.7%で10ポイント以上も改善したのです。こういう数字を出すためにやってきたわけではないのですが、このように結果が見えてくれると嬉しいものですね☆　引き続き、地域のための活動を続けられるように精進してまいります。

※人口減危機感、村ぐるみで移住促進奏功　奈良・川上村と京都・南山城村 － 産経ニュース (sankei.com)

蒲生4丁目のまちづくりと共生社会の考察

野口隆(理事／奈良学園大学特別客員教授)

大都市の既成市街地や、地方の歴史のあるまちで、ながく無視され放置されていた空家を再生し、複合施設やレストラン、土産物屋などに再生し、まちの活性化を進めているまちづくり・地域づくりの事例は多い。古くは長浜市の黒壁ガラス館を中心としたまちの再生があり、大阪市では、空堀商店街界隈、蒲生4丁目、中崎町が知られている。

筆者も、まちづくりや地域活性化活動に関わってきたなかで、これらの空家再生を中心にした、新しい経済活動モデルの実践には興味をもってきた。その調査の結果は、これまでにも、奈良フェニックス大学の講義や雑誌などで紹介してきたが、問題意識は、主に地域活性化、地域経済の再生など経済的な成果に焦点を当てたものが多かった。

しかし近年、共生社会システム学会(2006年設立)の活動に関わるようになってから、これらの既成市街地再生の活動が、古いまちの昔からの住民と、新しくコトを起こそうとするよそ者や若者を含むまちづくり活動メンバーとの関わりが、古い社会の人々と、移住者や新規事業者たちの対立と葛藤の末の共生に至る(至らない場合もある:一方の完全勝利、抑圧)社会の変化のあり方の一つの典型事例ではないかと考えるようになった。

そこで、空家再生のまちづくりの場を、共生が生まれる(or 生まれない)異質なもの、人々の出会いと衝突のプロセスとして考察してみようと考え、以下に紹介するような「調査の企画」を立てた。今後、その成果を、NAEDの皆さまに紹介していきたいと考えている。

＜蒲生4丁目のまちづくりと地域社会の変化調査企画(案)＞

1. 調査の目的と背景

①共生社会研究

著者は、共生社会システム学会に所属している。学会の趣旨は異質なモノが争わず、共生できるようにするのは、どうすれば良いかを検討することである。著者の関心は、地域社会における異質な人々の共生のありかたの模索にある。

②蒲生4丁目のまちづくり

別件で紹介したことがあるが、大阪市東部に位置する蒲生4丁目は、戦前からの木造住宅が多いまちであるが、ここで、近年、空家を改造してレストランや食堂を開業する「空家再生プロジェクト」が進んでいる。古くから

の老朽住宅が並ぶまちに新しい店舗ができることで、町並みが変わり、地域社会も変わりつつある。古くからの住民と、新しく立地した店舗の経営者・従業員との交流が始まっており、新旧住民の共生が始まっている。

③調査は、このような新旧住民の共生と交流の実態を把握し、今後の共生社会のあり方を検討する手がかりを得ようとするものであり、これまで比較的調査が少なかった都市社会にスポットをあて、共生社会研究に一石を投ずることを目的としている。

2. 調査の対象

調査の対象は主に次の 2 つのグループの人々である。

①店舗経営者たち

新規に立地した店の経営者は、そのほとんどが、この地域の空家開発のリーダである W 氏が"一本釣り"してきた若い人材である。彼らは月 1 回のグループ会に参加し、互いに協力関係にあり、共同のイベントなども行っている。

②古くからのまちの住民

住民は、古くからこのまちに住み、近隣の工場などで働いていた人が多い。新しい店舗ができ、町並みが変わり、さらに、前述の店舗の経営者グループや W 氏のまちづくり活動に関わるなかで、彼らの生活が少し変わりつつある。

③新旧住民の関わりと、それぞれの生活の変化、意識の変化を検討することが、本調査の目的である。

3. 調査の方法

主に、インタビュー、ヒアリング、グループディスカッションを通じて、新規立地者、新住民、旧住民、それぞれの生活・行動・生活意識の、従来からの実態、新しい変化について把握に務める。

①新規立地の経営者

・ それまでの仕事、生活、意識
・ 新規立地のきっかけ、動機、立地後の業務、生活、意識の変化
・ 近年の活動と意識

②古くからの住民

・ 居住のきっかけ
・ これまでの生活、仕事、買い物、遊び……
・ お店が建ち始めてからの生活（当初、途中、最近）

③新住民

地域には老朽住宅が多かったこともあり、マンションや新規建売住宅の建設が多く、新住民、若い住民（子連れ）が多い。この人たちは、蒲生 4 丁目のまちの何を見、どのような動機で来住者となったのか、そして今、まちをどう評価しているのか、これについても調べてみたい。

6 月 1 日の第 16 回 NAED 地域づくりシンポジウムのご案内です。ぜひ、ご参加ください。

地域づくりを指導・支援する「地域プランナー&コーディネーター」の資格者たちは、現世代の満足を充たしつつ、将来世代へ引継ぎ得る地域を創ること(Ecological Development)を目指して、各地域で活躍しています。
このシンポジウムは、先人たちが守り続けてきた活動への認識を高め、さらに深めていき、 次世代に向けてこれを継承していく仲間づくり、人づくりの啓発を目的とします。

プログラム

12:30 受付・開場
12:50 認証式
13:00 開会挨拶
13:10 【基調講演】 奈良県観光局長 竹田博康氏
14:40 休憩・展示紹介
14:50 【活動紹介】
奈良フェニックス大学地域研究科「山添グループ」
山添村における"共働"活動と今後の展開
「故郷を未来に残す小さな挑戦」
平田 正
「ひろせやなぜキャンプ場の利用運営への提案」
飯田 彰孝
「快慶作阿弥陀如来像の活用を通じた村おこし」
阪口 文和
「蕎麦プロジェクトの立上げ」
鍋島 明美

15:10 地域P&C養成塾16期生
「和太鼓で繋ぐ地域と人のえにし」
古村勝雅
「佐渡から奈良にならさど〜ぉ!」
曽根みのり
「ごまをする」
新屋奈々子
「新米が見た三郷」
安藤大輔
「青い目で見た日本、外から見た地域づくり」
スカルディノ・エバン

16:15 総評
16:30 閉会
17:00 交流会

交流会の準備をします!手伝ってね♪